

研究紀要第23号

# ひとりひとりを生かす保育

—子どもの気持ちや動きに応じた働きかけ—

1987

島根大学教育学部附属幼稚園

## は じ め に

巨大迷路（メイズ）という遊びが流行しているということです。

広場にしつらえた巨大な迷路は、紙に描いた迷路と違って全体が一度に見通せないため、人の勘と辛抱強さだけが頼りでひたすら出口を求めるこの遊びは、それだけにスリルが伴って今人気上昇中だといわれています。

ところで、私たちが「ひとりひとりを生かす保育」を研究主題に掲げて、今年度で15年目をかぞえます。

ひと口に15年といっても、人それぞれにその受けとめ方も異なるでしょう。

15年の歳月を「よくも15年も」と受けとめる人もいれば、「まだ15年になったばかり」と一向にその長さを感じない受けとめ方をする人もいるはずです。

私たちが、15年もの間「ひとりひとりを生かす保育」にこだわり続けている理由は、この主題のもつはかり知れない奥行きにあります。巨大迷路にたとえれば、出口がみつからず行きつもどりつしている状態に似ています。しかし、確実に出口が近づいているという実感は、15年もの研究のあゆみから感じとることができます。なぜなら、出口がふさがれた時、私たちはそれまでの経験を手がかりにして、次の出口へと衆知を集めてきました。また、幾度となくあともどりを繰り返しながらも、あともどりを無駄にしないようにとお互いの胸に強くたたき込んで今日まで歩んできました。それは、「ひとりひとりを生かす」という容易ならざる迷路を、たとえ稚拙なあゆみであろうとも私たちの手で出口へと導くための長い道程がはっきりと残されているからです。

今年度は、「子どもの気持ちや動きに応じた働きかけ」という壁と向い合うことにしました。子どもひとりひとりが生き生きと目を輝やかせて活動に取り組むために、子どもの気持ちや動きを的確にとらえた保育者の働きかけやかかわり方を明らかにしていくことが次の出口への足がかりだと考えたからです。

ご参会の先生がたの忌憚のないご批正、ご指導を賜わることができれば誠に幸に思います。

昭和62年7月

島根大学教育学部附属幼稚園長

福 井 一 明



# 目 次

## ひとりひとりを生かす保育

### ——子どもの気持や動きに応じた働きかけ——

#### 総 論

I 研究主題について	1
1. 主題追求の経過	1
2. 副主題「子どもの気持や動きに応じた働きかけ」の設定について	3
II 62年度（第15年次）の保育研究	3
III 研究の方法と視点	3
IV 研究の実際と課題	4
1. 経験や活動の構想と場面場面における働きかけ	4
(1) 経験や活動の設定	5
(2) 子どもの追究の過程と働きかけ	6
(3) 期にふさわしい経験や活動としての組み立てと働きかけ	9
事例1. 保育者のイメージと子どものイメージのずれ	9
事例2. 期に期待する「おみせごっこ」の活動の姿と組み立て	10
① 活動に期待する姿と実際の姿とのずれ	11
② その期の発達の特徴を生かす	13
(4) 「日常的な活動」の組み立てと働きかけ	16
事例1. 「男の子の数と女の子の数みんな合わせてゆりさん」	18
事例2. 「たんぼぼの活動」	18
事例3. 「手をつなごう」の活動	19
2. 子どもがつくる活動の流れと保育者の節づくり	21
(1) 子どもがつくる活動の流れや節をとらえる	21
(2) 子どもの気持を読みとる	23
(3) 寄り道を大切にする	25
V 今後の研究の課題	28

文責 野津道代

#### 各 論

子どもの気持や動きに応ずる保育の組み立て	野津 道代	29
子どもの活動の節目に応じた保育者の節づくりについて	今井 由起	30
自然さを大切にされた保育	星野 和美	31
ひとりひとりのイメージにそった遊びの支え方	小林 保恵	32
その子らしさを大切にする指導	森山 純子	33

資料 「期」の概念及び教育課程	卷 末
-----------------	-----

— 研 究 同 人 —

園 長	福 井 一 明
副 園 長	柘 植 克 彦
研 修 部 長	野 津 道 代
教 官	森 山 純 子
	星 野 和 美
	小 林 保 惠
	今 井 由 起
講 師	光 石 江 里
	德 永 直 美
前 園 長	永 田 栄 一
前 講 師	松 岡 美 佐 子